

# 蘇芳集

立夏

青山

丈

二三枚レタスを剥がす立夏かな  
吊り終へるまで風鈴の鳴り通す  
生ぬるき麦茶だあれも来なくなる  
駅近く来て母の日となつてくる  
紫陽花を見てゆくだけの手が濡れる  
浮葉へとつと繋がる浮葉かな  
どこを見て茅の輪を抜けて来たものか

麦湯

下平直子

男臭くて六月の古本屋  
麦湯注ぎ亡きあとのこと少し言ふ  
網戸して月光あをき文机  
久闊を叙する新茶を濃く淹るる  
取りとめのなき六月の長電話  
白鷺の白き光となる高さ  
筑波嶺の空青あをと夏至明くる

昭和の子

富田正吉

鯉幟われは昭和の子なりけり  
はつ夏の雲のかたちのつまびらか  
ゆふぐれの牡丹に熱のありにけり  
すこやかな風に吹かるる花菖蒲  
どうしても七つにならぬ虹のいろ  
目も耳も前へ前へと青嵐  
正座よりあぐらがよろし豆ごはん

蟬の昼

野路 斉子

蚕 豆

峰岸 よし子

ときどきはソプラノも来て窓の蟬  
わが影のどれか判らぬ蟬の昼  
クレーンの仕事酷暑に立たされて  
どの樹にも蟬ゐて鳴いて森と云ふ  
裏戸よきただ涼しいと云ふだけの  
まいまいの独り言かと風の音  
クレーンのと立ち止まる秋の声

あらあらと

前田 陶代子

料亭の朝のしづもり花ざくろ  
凌霄の風と吹かれて今日忙し  
出し迷ふ文の一通芥子赤し  
雨容れて川の勢へる芒種かな  
あらあらと雨後の木洩日桜桃忌  
いにしへの音たてて竹皮を脱ぐ  
翳り深めて保存樹の青銀杏

ゆふぐれの睡魔やからすうりの花  
翡翠の瞬時の水音のこりけり  
太宰忌の風の降らせし木々雫  
あとずさり静かなる飢ゑはじまりぬ  
青鷺の水の一点見て暮色  
蚕豆のさみどりほどの父情かな  
泰山木一花の端座雨の中

桜桃忌

宮尾 直美

巻き上げて潮の匂ひの青簾  
桜桃忌一ト振りで切る傘の雨  
来し方の記憶茫茫梅雨の月  
老鶯の一声に空青きかな  
緑陰を出でてわが影老いしとも  
螢火の明き一つは父ならむ  
太宰忌の夕日を追へば岬まで

雨 音

八木下 末黒

隠れ家の大き葎原行々子  
夏鶯リュックザツクの飯を出す  
太宰忌の雨音午前一時かな  
仕方なく飯など炊いて明易し  
凌霄花や画家のパレット色かさね  
夏至暮るる常と変らぬ早寝かな  
ワクチンを打つて発熱半夏生

立 葵

吉田 幸敏

月影は神の階ねむの花  
一呼吸置いて嬰笑むアマリリス  
田に水のたつぷり張られ青葉木菟  
とりどりの柵田の形早苗打つ  
さびしさのはや色に出て余り苗  
初蟬の声とも思ふ遠すぎる  
その上に蕾がふたつ立葵

夏 服

小川 美知子

少年は刹那を走る夏あざみ  
バス停を見つけるまでの青野行  
後ろ手をゆつくりほどく雲の峰  
夏服や明るい空に月が出て  
白鷺の四辺に雨が降つてをり  
ふつつりと小説了はる夜の蟻  
大楠の奥に雨降る半夏かな

明日へ

木内 憲子

うつうつと芒種の顔を洗ひをり  
梅雨冷の一語一語をもて明日へ  
麦秋のある日晴れたる鳥のこゑ  
丁度良き風と潜れる青茅の輪  
夏至の日の束をはみ出す一紙片  
雲の峰やうやく些事の片づけば  
夏蝶となりてこの海渡らむか